

東山道をめぐる攻防

- 米原・醒井・柏原をめぐる -



探訪されるみなさまへ

- ・ここに掲載している情報は、平成24年夏現在のものです。探訪される際には、公開の有無・休館日・料金などあらためてご確認ください。
- ・ゴミは各自で持ち帰る、騒がないなどマナーを守ってください。

埋蔵文化財活用ブックレット4

東山道をめぐる攻防 - 米原・醒井・柏原をめぐる -

刊行：平成24年10月日
編集：滋賀県教育委員会
制作・刊行：滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
住所：〒520-8577 大津市京町四丁目1番1号
電話：077(528)4674 FAX:077(528)4956
e-mail: ma07@pref.shiga.lg.jp

印刷：●●印刷株式会社























はじめに - 東山道をめぐる攻防 -

東西にのびる日本列島の中ほどにある近江は、京・京都をめぐって日本の東西を結ぶ地として重要な役割を担いました。とりわけ、関ヶ原を介する東山道（中世東海道・近世中山道）周辺では、いくつものドラマが展開しています。

ひとつは、元弘2年（1332）に後醍醐天皇とともに鎌倉幕府を倒そうと企てた北畠具行がとらえられ佐々木道誉によって斬られたのが清滝。もうひとつは、その翌年討幕軍により京都を追われた六波羅探題北条仲時ら一行430余名が佐々木道誉に退路を断たれて進退きわまり自刃した番場の蓮華寺。また、京極家の本拠地である清滝には歴代墓所のある徳源院、天下分け目の関ヶ原の戦いの際に小早川秀秋とかかわりをもった柏原の成菩提院などがあります。

これらのほかには、米原・番場・醒井・柏原といった宿場もあります。米原から柏原にかけての歴史の深さと豊かさを感じていただきたいと思えます。

【凡 例】

- | | |
|--|---|
|  寺社仏閣など見どころ |  よろず買い物 |
|  史跡・名勝など見どころ |  コンビニエンスストア |
|  石碑など |  お食事処 |
|  駅や公共施設 |  喫茶処 |
|  駐車場 |  甘味処（お菓子） |
|  トイレ |  お茶屋さん |
|  警察署・交番 |  お酒屋さん |
|  学校・幼稚園・保育園 |  お魚屋さん（湖魚） |
|  郵便局 |  ガソリンスタンド |
|  銀行など |  お宿 |

目 次

はじめに - 東山道をめぐる攻防 -	1
目 次	2
米原駅から醒ヶ井駅	3
米原湊と米原宿・深坂道	4
青岸寺	5
湯谷神社	6
交通のまち米原	7
米原の曳山・米原の道標	8
直孝神社	10
番場宿・北条仲時墓	11
蓮華寺	12
蓮華寺と番場忠太郎	13
久礼の一里塚	14
宿場と立場	15
樋口・河南の茶屋	16
醒井 水の駅	18
近江水の宝 醒井・醒井の近代建築	19
醒井宿・了徳寺のオハツキイチョウ	20
柏原駅から柏原駅	21
柏原宿・柏原宿歴史館	23
成菩提院	24
ゲンジボタル	25
徳源院・徳源院京極家墓所	27
発掘された能仁寺	28
北畠具行墓	29
柏原御茶屋御殿	30

米原駅から出発!

探しに行こう
町の文化財を

一日コース
です!



米原湊と米原宿

北国街道の宿場である米原宿は、のちに宿本陣を務める北村源十郎が彦根藩の命で、慶長8年(1603)に湊を開いたことに始まります。米原湊は現在の米原駅付近にあたりますが、湊が開かれるまでの米原は、わずかに軒ほどの小さな村であったと伝えられています。

その後に米原宿と中山道の番場宿を結ぶ新道(深坂道)が開削され、米原湊は東海・東山道の物資などを京・上方へ積み出す湊として繁栄し、長浜湊、松原湊と並んで「彦根三湊」の1つに数えられました。

深坂道

北村源十郎によって慶長16年(1611)に、米原宿と番場宿を結ぶ深坂道を開通されたことで、中山道は険しい磨針峠を避けて米原湊と直結し、旅人だけでなく多くの物資が運ばれることになりました。深坂道は米原宿の北はずれで北国街道から東へと分岐しますが、この場所には弘化3年(1846)再建と刻まれた石造道標が建てられています(米原市指定文化財)。



青岸寺

南北朝時代に佐々木道誉が自ら書き写した経典を納めて、開創したとされる曹洞宗の古刹で、もとは不動山米泉寺と称しました。戦国時代に兵火を受け、観音像1体を残して寺は荒廃しましたが、江戸時代前期に彦根藩主井伊直澄の命を受けて入山した彦根大雲寺の要津禅師によって再興され、現在の寺号に改められました。この頃に造営されたつきやまりんせんしきかれさんすい築山林泉式枯山水庭園は、彦根城のげんきゆうえん らくらえん玄宮園や楽々園を築いた井伊家家臣の香取氏による作庭と伝えられ、昭和9年に国の名勝に指定されています。

拝観料 300円 問合せ先 0749-52-0463



青岸寺庭園

湯谷神社

もとは青岸寺の境内にある鎮守社であるとともに、米原村の氏神としての役割を担ってきました。この地で見つかった温泉に祠を建てたのが始まりと伝えられています。毎年10月の例祭には3基の曳山の舞台上、子ども歌舞伎が演じられます(県選択無形民俗文化財)。



湯谷神社本殿

交通のまち 米原

米原は交通のまちとして知られています。古代から中山道と北陸道の分岐点として発達しました。江戸時代には米原湊が開かれ、北国街道の米原宿、中山道には番場宿、醒井宿、柏原宿の3ヶ所の宿場町が置かれていました。現在でも名神高速道路と北陸自動車道の分岐点である米原JCTがあり、JR北陸本線の起点、かつ、滋賀県内で唯一東海道新幹線が止まる米原駅があります。

多くの人々の行きかいの中から多くの文化が生み出されてきたのです。

結節点の駅で発展していくのが駅弁屋さん。鉄道を取り巻く環境が変わっていく中で、地域の個性を生かした弁当を作りだしておられます。



米原駅の駅弁屋さん



線路は東と北へと分かれていきます。

米原の曳山

米原の曳山は、旭山、寿山、松翁山の三基があり、シャギリの音を響かせた曳山巡行と浄瑠璃と三味線に合わせて演じられる子ども歌舞伎が広く知られています。

宵宮は、笛・太鼓のお囃子に合わせて、「上り曳き」が行われ、各山組の若連中がいなせな半被姿で山を曳行します。翌日の本宮には、露払いを先頭に、紋付羽織の世話役と若連中に守られた稚児役者による「役者御渡」があり、神前で狂言が奉納されます。

この曳山は、長浜の曳山祭にならって、江戸時代後半に始まったといわれています。近隣の長浜の曳山と比較して「山を見るなら長浜、芸を見るなら米原」と言われるそうです。

演じられる子ども歌舞伎は、毎年演目が変わります。右下の画像は『銘刀石切仏御前 三段目 西八条之段』。平清盛と祇王のお話です。



子ども歌舞伎

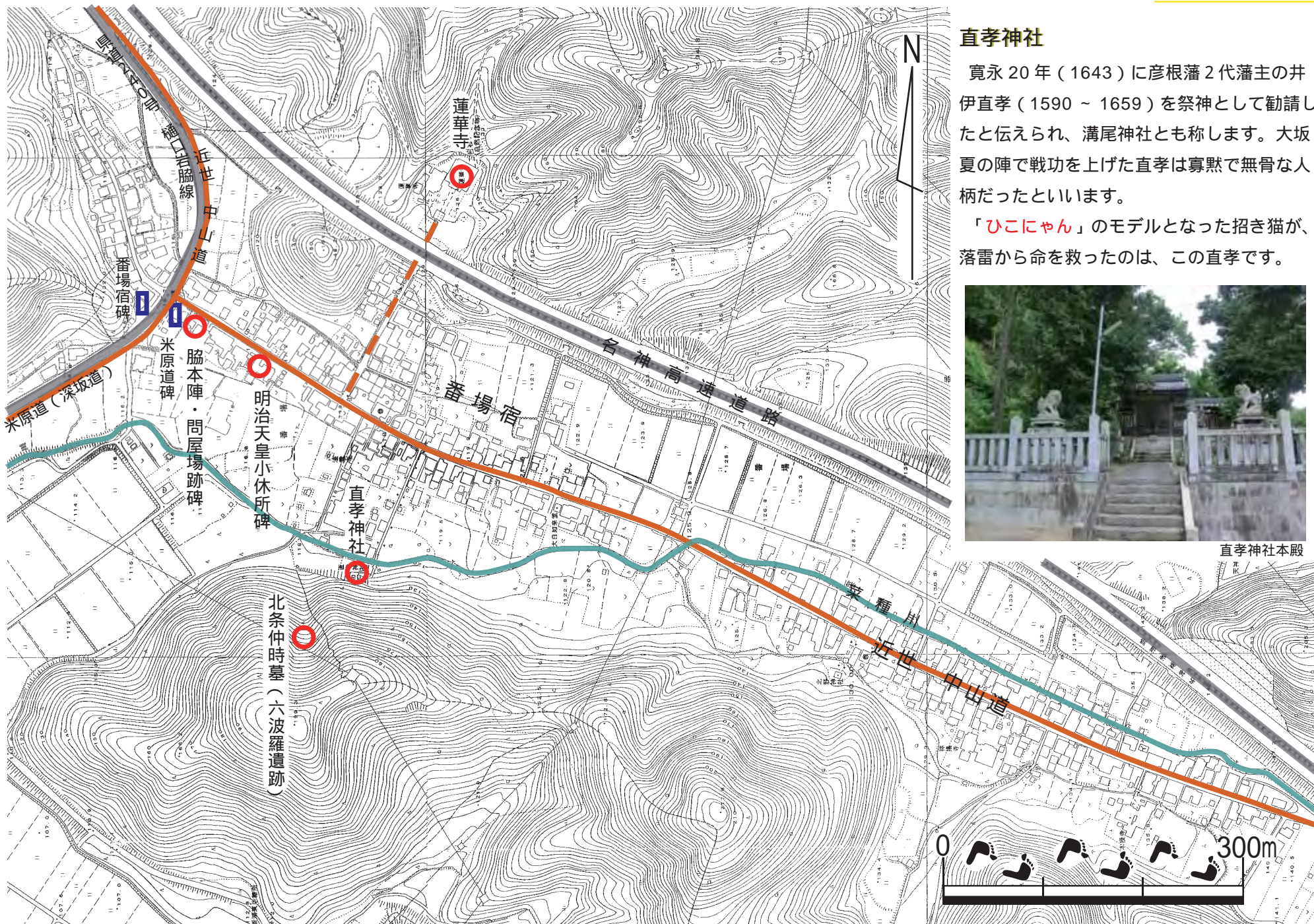
米原道標

米原宿から番場宿に入ったところに道標があります。本来は異なる所に建てられていたのですが、移動して現在地にあります。

指差しとともに「米原 汽車汽船 道」との銘文があります。米原から関ヶ原を経由する東海道線が開通した明治22年(1889)以降に建てられたものと考えられます。



番場宿の米原道標



直孝神社

寛永20年(1643)に彦根藩2代藩主の井伊直孝(1590～1659)を祭神として勧請したと伝えられ、溝尾神社とも称します。大坂夏の陣で戦功を上げた直孝は寡黙で無骨な人柄だったといひます。

「ひこにゃん」のモデルとなった招き猫が、落雷から命を救ったのは、この直孝です。



直孝神社本殿

番場宿

蓮華寺の弘安七年銘の梵鐘に「馬場宿」の文字が見られるように、番場の地は鎌倉時代から東山道の宿場としての役割を果たす交通の要衝でした。江戸時代に入って、慶長16年(1611)に米原湊と番場を結ぶ新道が開かれたのに伴って、寛永年間(1624～1644)に中山道との合流地点に集落の位置をやや東へ移動させて設けられたのが中山道番場宿です。

この新たに開かれた集落を下番場、旧来の集落部分を上番場と呼びます。天保14年(1843)の時点で、番場宿の町並みは一町十間余りという記録がありますが、これは中山道の宿場で最短の数字です。

宿の南東には、鎌倉時代に土肥氏によって築かれたと伝えられ、織田信長を軸に近江を主戦場の一つとした元亀争乱において登場する鎌刃城跡(国の**史跡**)があります。現在見ることのできる石垣や堀切などは、元亀年間(1570～73)のものと考えられています。



番場宿遠景



鎌刃城跡

北条仲時墓

蓮華寺で元弘三年(1333)に自害した六波羅探題北条仲時の墓と伝えられる石造五輪塔が、番場宿の西側にある六波羅山の山頂近くに残されています。享保年間(1716～1736)に蓮華寺から移されたと伝えられ、この山が六波羅山と呼ばれるようになったのは、この時からです。道が整備されていないため、訪れる人の少ない穴場です。

ろくはらたんたい

蓮華寺

1300年前に聖徳太子が創建したと伝承される寺で、弘安7年(1284)に土肥三郎元頼どひさぶろうもとよりが再興したとされています。この際に一向上人を開山として迎え、従来の寺名法隆寺ほんしゅうを八葉山蓮華寺に改めたといひます。

境内の鐘楼しょうろうにある梵鐘ぼんしゅう(国の**重要文化財**)は、弘安7年に大檀那沙弥道日おおだんなしやみどういち(土肥元頼)が鑄造させたものと銘文に刻まれています。土肥元頼の墓と伝承される石造宝篋印塔ほうきょういんとうも境内にあり、**米原市指定文化財**となっています。

佐々木道誉に進路を断たれて当地で自刃した北条仲時以下430余名のうち、氏名が判明した189名の名前を記した『紙本墨書陸波羅南北過去帳』(国の**重要文化財**)も所蔵しており、今も供養が行われています。



土肥元頼墓



蓮華寺五輪塔群



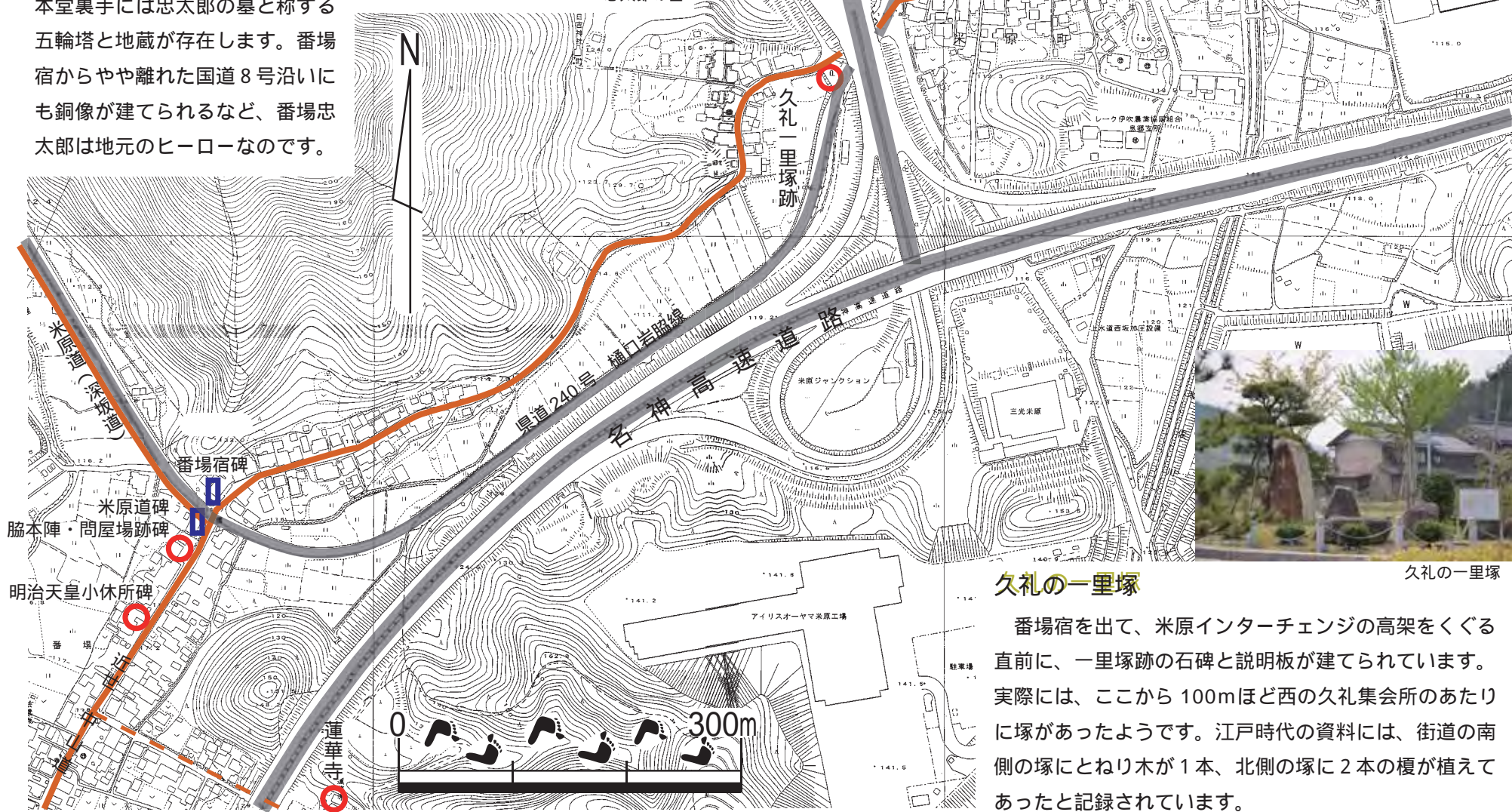
蓮華寺陸波羅南北過去帳

蓮華寺と番場忠太郎

番場宿の名前は、長谷川信の戯曲「臉の母」により、昭和になってにわかに脚光を浴びました。近江国番場宿の出身とされる番場忠太郎は架空の人物ですが、蓮華寺本堂裏手には忠太郎の墓と称する五輪塔と地蔵が存在します。番場宿からやや離れた国道8号沿いにも銅像が建てられるなど、番場忠太郎は地元のヒーローなのです。



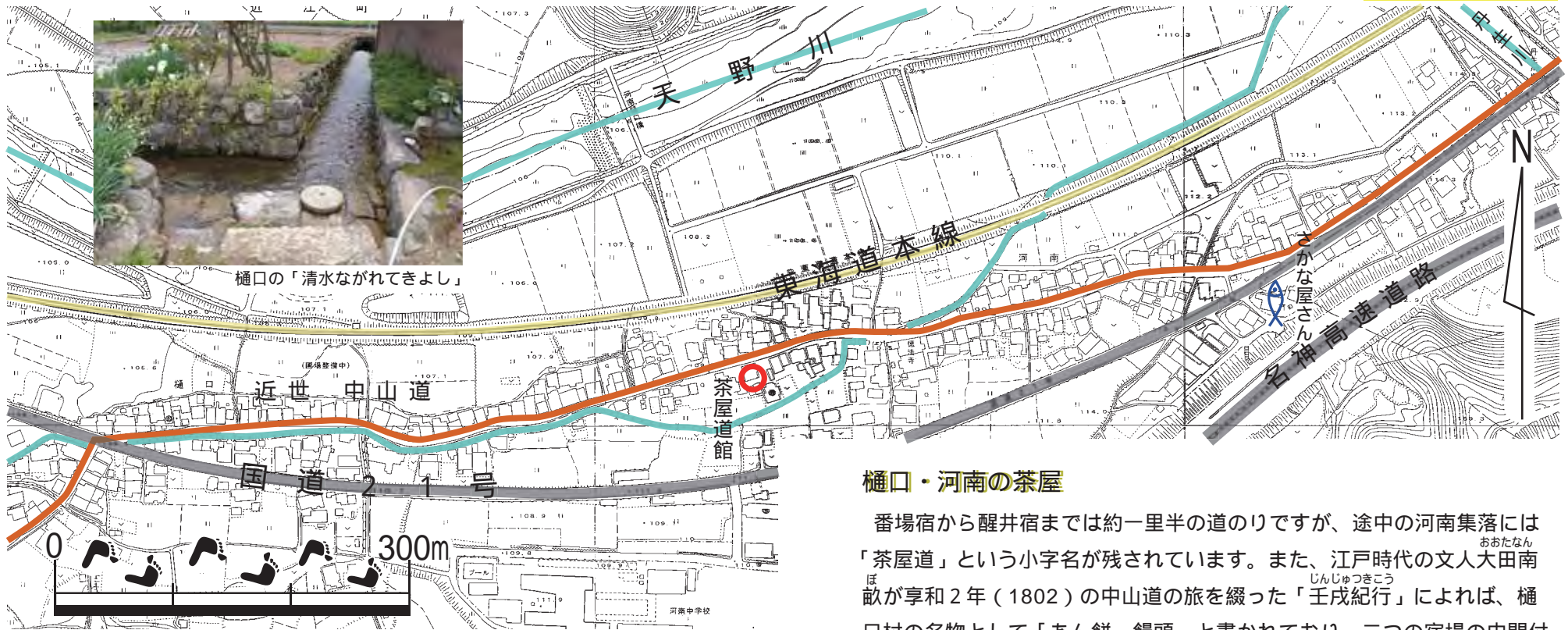
忠太郎の墓



久礼の一里塚

久礼の一里塚

番場宿を出て、米原インターチェンジの高架をくぐる直前に、一里塚跡の石碑と説明板が建てられています。実際には、ここから100mほど西の久礼集会所のあたりに塚があったようです。江戸時代の資料には、街道の南側の塚にとねり木が1本、北側の塚に2本の榎が植えてあったと記録されています。



樋口・河南の茶屋

番場宿から醒井宿までは約一里半の道のりですが、途中の河南集落には「茶屋道」という小字名が残されています。また、江戸時代の文人^{おおたなん}大田南畝が享和2年(1802)の中山道の旅を綴った「壬戌紀行」^{しんじゅつきこう}によれば、樋口村の名物として「あん餅、饅頭」と書かれており、二つの宿場の中間付近ということで、樋口から河南にかけて立場茶屋があったようです。現在も、河南自治会が古い民家を利用した「一服処」として「茶屋道館」を設けています。

大田南畝は「清水ながれてきよし」とも記していますが、現在でも街道筋に沿って流れる水路を見ることができます。

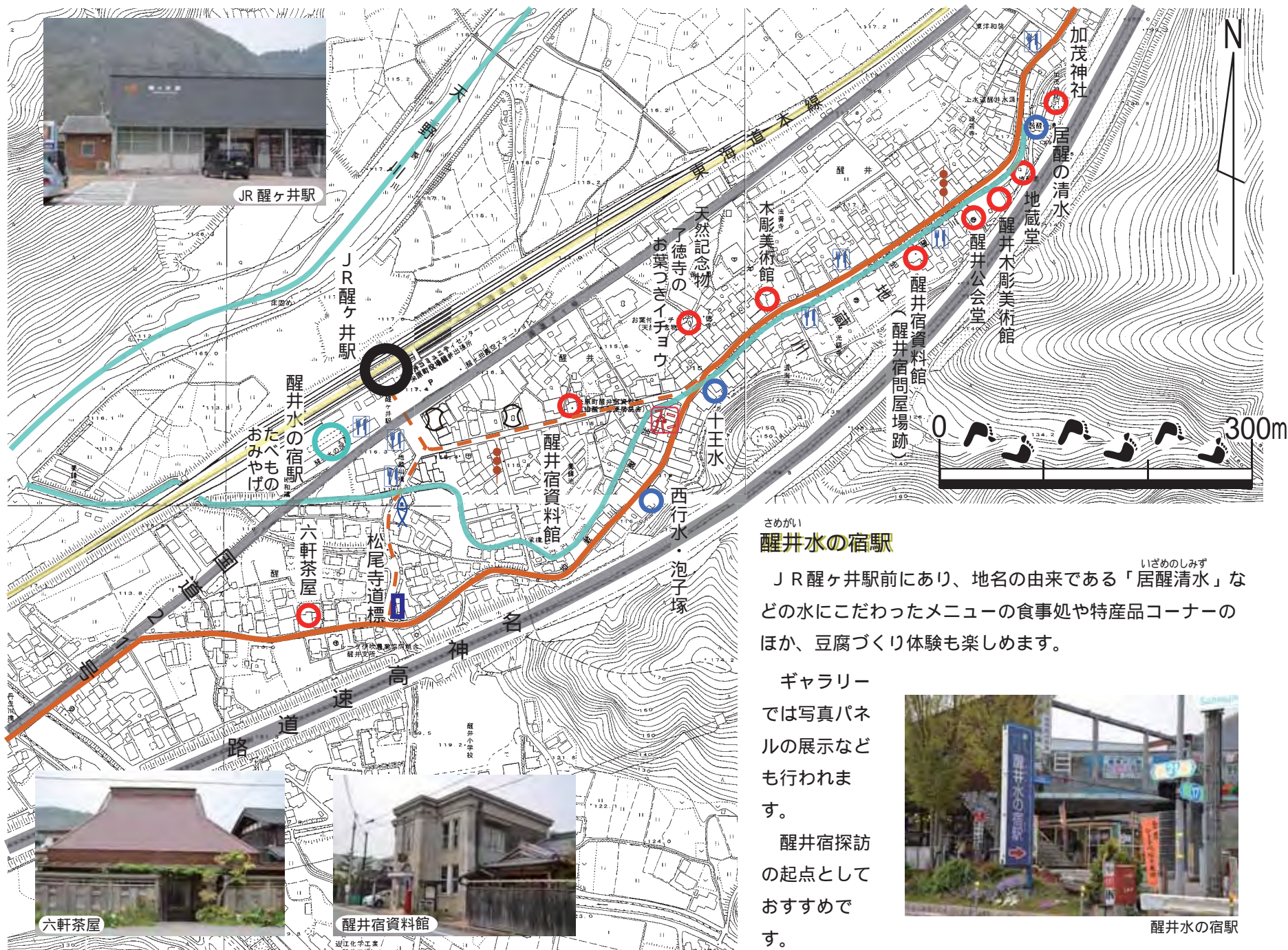


河南の茶屋道館

たてば 宿場と立場

幕府が設けた中山道六十九次の宿場のほかに、宿と宿との間にある村が煮売茶屋などで旅人の休泊を受け入れたり、旅籠や問屋を営んだりすることが、実際には行われていました。このような場所は中山道に限らず存在し、俗に「間宿」と呼ばれます。^{あいのしゆく}本来の宿場に悪影響を及ぼすとして、幕府はたびたび禁令を出して、このような場所での宿泊などを取り締まっています。

峠の茶屋などのように、間宿よりも小規模な施設が立場です。旅人たちは、立場で営業している茶屋で休憩し、名物を味わったりしていました。



さめがい
醒井水の宿駅

いざめのしみず
JR醒ヶ井駅前にあり、地名の由来である「居醒清水」などの水にこだわったメニューの食事処や特産品コーナーのほか、豆腐づくり体験も楽しめます。

ギャラリーでは写真パネルの展示なども行われます。

醒井宿探訪の起点としておすすめです。



醒井水の宿駅

近江水の宝 醒ヶ井

加茂神社境内の「居醒清水」をはじめ、西行水、十王水といった豊富な湧水を水源とする地蔵川は、醒井宿の中を中山道に寄り添うように流れています。これらの湧水は霊仙山の伏流水が吹き出したもので、平成 20 年には環境省の「平成の名水百選」にも選ばれました。

地蔵川の流れの清らかさは古くから広く知られてきました。水源の 1 つである「居醒清水」は、『日本書紀』『古事記』で伊吹山の荒ぶる神に敗れたヤマトタケルが、この水で正気を取り戻し、醒井の地名はここに由来するとされています。

現在もキンポウゲ科の沈水植物である「梅花藻」が生育する清流として親しまれ、見頃である 6～8 月頃には多くの観光客でにぎわいます。また、地蔵川には各戸ごとに川へ降りる洗い場が設けられるなど、清流と日常生活が密着した親水性の深い風景が展開しています。滋賀県教育委員会では、この醒井を「**近江水の宝**」の一つに選定しています。



居醒清水



西行水

醒井の近代建築

醒井には、国の**登録有形文化財**になっている近代建築が 2 棟あります。ひとつは大正 4 年（1915）に著名な建築家ヴォーリスが設計に携わった醒井宿資料館で、昭和 9 年の改修を経て、昭和 48 年まで郵便局として使われていました。一階部分は休憩場所として開放されています。

もう 1 棟は醒井公会堂ですが、残念ながら通常は内部の公開は行われていません。和洋のデザインを混在させた昭和 11 年建築の木造平屋建です。

醒井宿

醒井の地名は鎌倉時代の「十六夜日記」にも登場し、番場宿と同様に中世から宿場としての機能を有していたようです。天保 14 年（1843）の記録に人口 539 人、戸数 138 軒とあり、あまり大きな宿場ではありませんが、人馬継ぎの間屋場が七箇所もあるのが特徴です。それぞれの自宅で交代で業務を行っていたようで、そのうちの 1 箇所が川口家住宅です（**米原市指定文化財** 旧醒井宿問屋場）。江戸時代中期（17 世紀中頃～後半）の建築と考えられ、一般公開されています。

醒井宿の西端には、江戸時代に建てられた草葺屋根の六軒茶屋のうちの一軒が、辛うじてその姿をとどめています。歌川広重によって版画で描かれたのは、この付近の场景のようです。



醒井宿資料館（醒井問屋場跡）



醒井宿の町並

了徳寺のおハツキイチョウ

了徳寺境内に生育しているイチヨウの雌株です。通常 1～2 個の楕円形の種子を葉に付けるという特徴を示し、先祖帰りによる奇形の種類です。花が葉から変化したものであることを裏付けており、植物の進化の過程を知る上で重要であることから、昭和 4 年に国の**天然記念物**に指定されています。

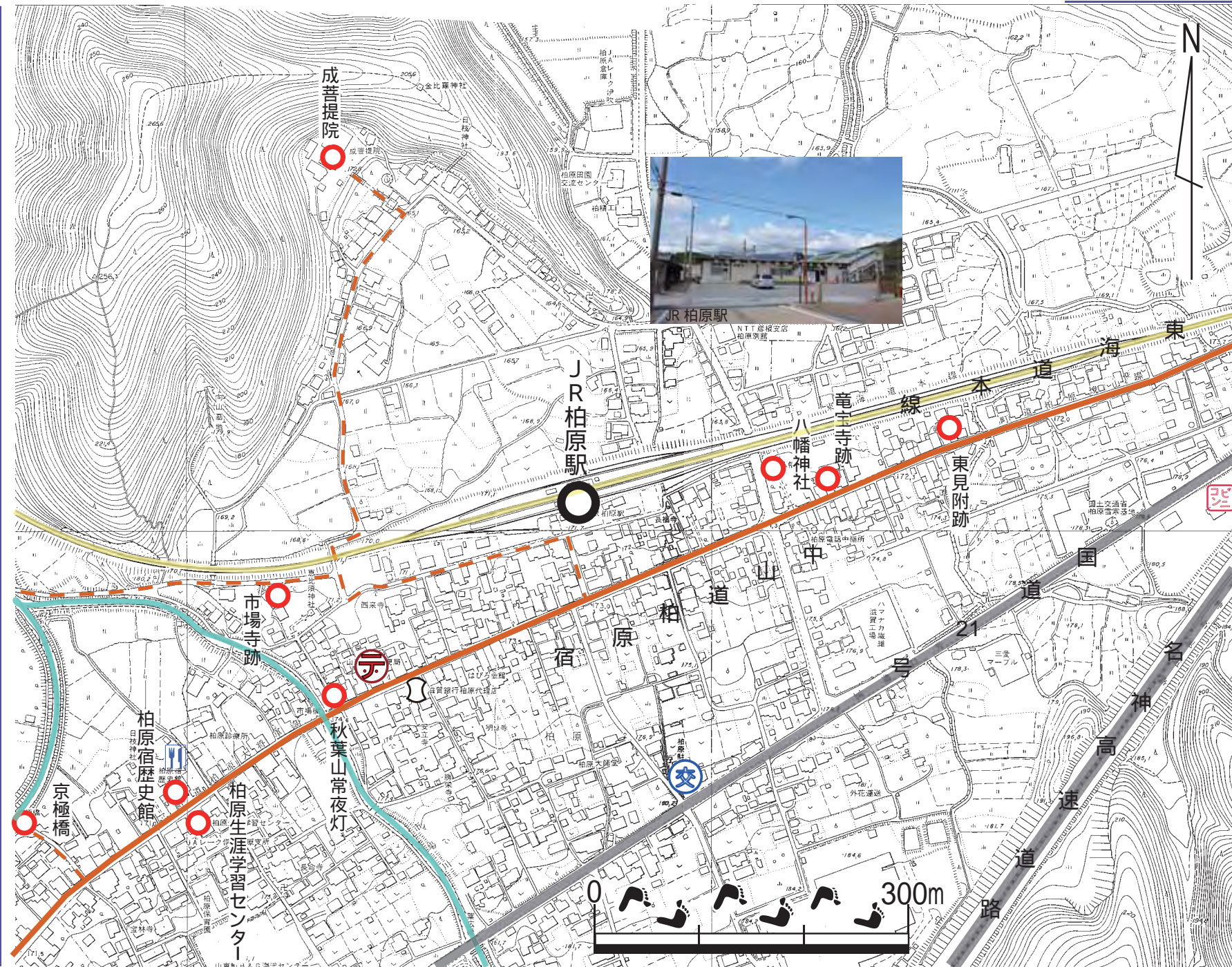


了徳寺のおハツキイチョウ

JR柏原駅から出発!

さあ町の文化財を探しに行こう

半日
コース



柏原宿

岐阜県との県境近くに位置する中山道 60 番目の宿場です。織田信長は近くの成菩提院を上洛の際の宿所とし、江戸時代には将軍が休憩・宿泊に使用した御茶屋御殿が設けられました。柏原宿の西端近くに“御茶屋前”の地名が残る場所が御殿跡です。

江戸時代には宿場の町並みが東西 1.4 kmにおよび、近江国内の中山道の宿場としては最長でした。本陣、脇本陣、高札場と 22 軒あったという旅籠屋の一部は、その場所が現地に表示されており、かつての風情を思わせる町並みを少ないながらも残しています。

良質のモグサの材料を産する伊吹山に近い、かつては伊吹モグサを売る店が 10 軒以上あったといわれています。その 1 軒の“伊吹艾亀屋左京家”は安藤広重の“木曾海道六十九次”の“柏原”に描かれた店舗で、現在も“伊吹堂”の看板を掲げていて、店内には巨大な福助人形が残されています。



柏原銀行跡



伊吹堂

柏原宿歴史館

柏原宿の町並みのほぼ中央に立地する資料館で、大正 6 年建築の旧松浦久一郎邸を改築した建物は、国の登録有形文化財に登録されています。おもに柏原宿とここで売られた伊吹モグサに関する資料を展示しています。

料金 大人 300 円、子供 100 円

問合せ先 0749-57-8020



柏原宿歴史館

成菩提院

天台宗。柏原宿から少し北に外れた山麓に立地する寺院です。最澄が談義所を建てたのにはじまるといい、延暦寺の別院として隆盛して、俗に“海道三箇談林の随一”と呼ばれた名刹です。14 世紀に越前平泉寺の衆徒の乱入をうけて全焼しましたが、延暦寺西塔の貞舜が再興。のちに信長から 150 石の寄進を受け、秀吉・家康から安堵されるなどして、江戸時代の盛期には六十四坊を抱える大寺院でした。

現在は本堂・庫裡・鐘楼などが並ぶだけですが、境内の広さとともに、山門から本堂までの石段両側にかけて坊院が建てられた敷地が並んでいるようすは、往事の繁栄をしのばせるに充分です。また、絹本着色浄土曼荼羅図・絹本着色聖徳太子像・絹本着色不動明王二童子像・金銅雲形孔雀文磬（国の重要文化財）絹本着色普賢十羅刹女像、平安時代の大般若経（滋賀県有形文化財）や文書など、多くの文化財を所蔵しています。

また、関ヶ原の戦いの折り、小早川秀秋とのかかわりを示す諸資料も遺されています。

問合せ先

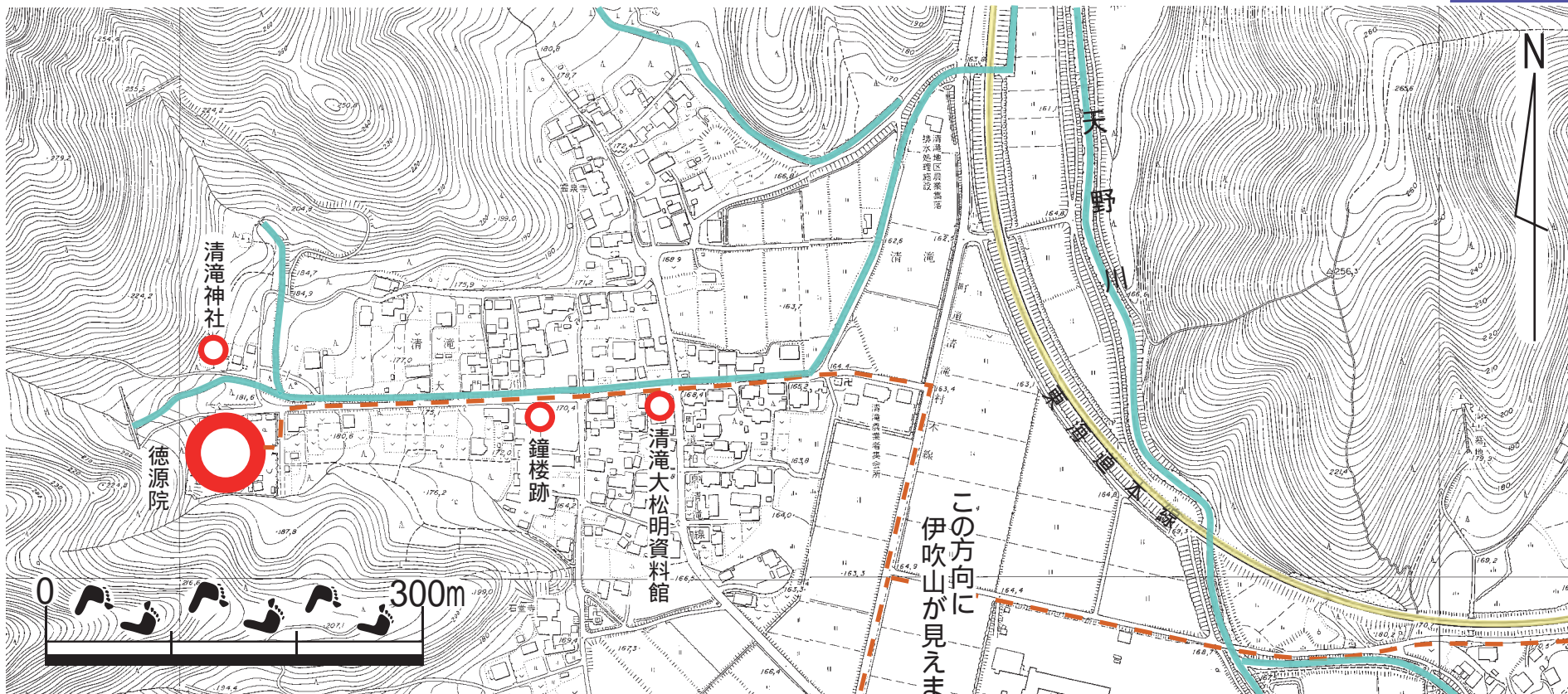
0749-57-1109



成菩提院浄土曼荼羅図

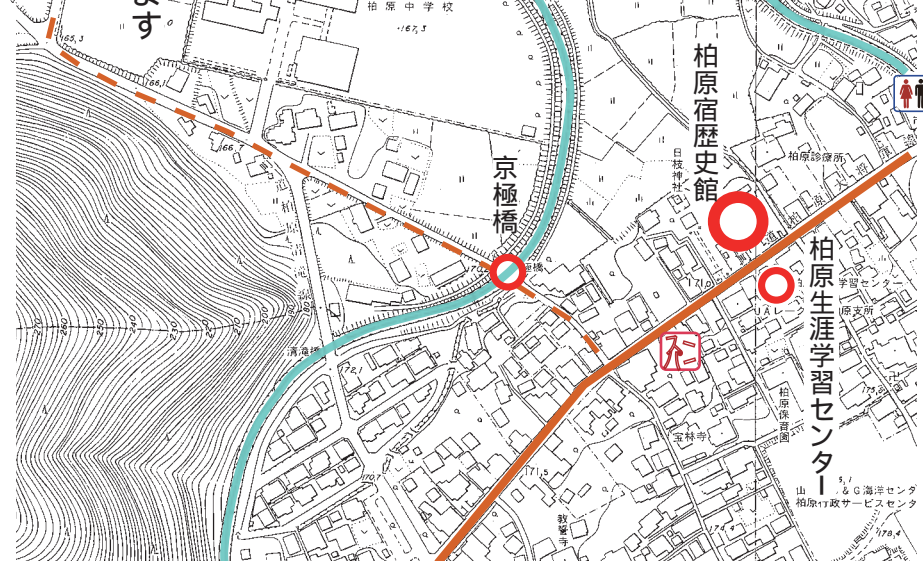


成菩提院不動明王二童子像



ゲンジボタル

滋賀県米原市を縦断する天野川はゲンジボタルの発生地。毎年多くの見物客が訪れます。「長岡のゲンジボタルおよびその発生地（国の**特別天然記念物**）」、「息長ゲンジボタル発生地（国の**天然記念物**）」と二つの天然記念物指定を受けています。5月下旬から6月にかけてゲンジボタルは見られ、ホタルの発生時期には「天の川ほたるまつり」が開催されており、会場周辺にホタル行灯が設置され、幻想的なホタルの乱舞が観賞できます。滋賀県教育委員会では「天野川のゲンジボタル」を「**近江水の宝**」として選定しています。



徳源院

徳源院は、柏原を本拠地とした守護大名京極氏の初代当主氏信が、弘安9年（1286）に建立した京極家の菩提寺です（天台宗）。一般に清滝寺徳源院の名で親しまれており、寺号は京極氏信の法名に、院号は江戸時代に丸亀藩へ転封された初代藩主の第二十一代当主京極高和の法名に由来します。二代目藩主の高豊は衰退した清滝寺を藩祖の墓所（徳源院）として整備し、現在の形になりました。

付近には西念寺（第二代宗綱）、能仁寺（第七代高詮）、勝願寺（第八代高光）といった歴代の菩提寺伝承地があり、清滝は京極家当主の墓地であったことがうかがえます。こうして散在していた墓を、高豊が徳源院本堂裏に集めました。寺には、三重塔（**滋賀県指定文化財**）、庭園（**滋賀県指定名勝**）などの文化財と、京極道誉が植えたという“道誉桜”が残されています。

拝観料 300 円。

要予約 0749-57-0047

徳源院京極家墓所

京極家墓所には歴代当主の宝篋印塔が上下二段に並んでいます（国の**史跡**）。上段には第十八代高吉まで、下段には中興の祖高次と、丸亀藩主と分家の多度津藩主の墓が並び、とくに高次の墓は石廟に、高豊ほか四人の墓は木造墓堂に納められています。



徳源院三重塔



徳源院庭園



徳源院京極家墓所（手前の石廟は高次墓）

発掘された能仁寺

徳源院の南に隣接する“ノネジダニ”と呼ばれる小谷には、京極高詮の菩提寺である能仁寺があったと推定されてきました。寺号が“ノネジ”に訛ったと考えられたのです。実際に、平成22年の発掘調査によって室町時代の寺院跡が発見され、伝承は考古学的に裏付けられました。

能仁寺跡は谷を切り開いて造成した平坦地から見つかりました。谷口から延びる参道の南側には長大な石垣を築いていました。その突き当たりには、礎石立ちの門柱を支える簡素な造り山門があり、山門の奥に石積みと石組み溝で区画した本堂基壇が残されていました。基壇の南には石組み溝で区切られた3ヶ所の区画が見つっています。

区画や基壇を巡る石組み溝には意図的にカーブさせたところが見られ、庭の遣り水として機能したと思われます。さらに寺院遺構の下層からは、丁寧な貼石を施した池跡も見つっています。また、寺の背後には墓地が広がっていました。

調査では京極高詮の墓跡を特定することはできませんでしたが、中世有力武将の菩提寺の全体をほぼ明らかにし、貴重な成果となりました。



調査地全景（左奥に三重塔がみえる）



出土した五輪塔を復元した様子



柏原御茶屋御殿

徳川將軍家の上洛時に休泊するために設けられた御殿です。家康・秀忠・家光あわせて十数回休泊したことが記録に残されています。

幕府権力が安定してくると、上洛が少なくなり、元禄2年（1689）には廃止されました。

